

山口はデスクに座り憤りを感じていた。山口が藤田の自殺を知ったのは出勤した際だった。同じ部屋にいる上井は、藤田の自殺の理由よりも施設の評判を気にしていた。

「きっとニュースにでるわね。それに新聞記者もやって来ていろいろ聞かれるかも。そうなったら返事によってはイメージダウンに繋がりがねないわ」上井は山口に顔を向けた。

「ねえ介護長、なんて答えればいいのかしら」

「事実を話せばいい」山口は小声でつぶやいた。

「何？」

山口は体裁ばかり気にする上井に苛立ちを覚えた。これ以上施設長の話を聞いていたら怒鳴りつけしまいそうだ。山口は立ち上がった。「亡くなった藤田さんを最初に見つけた夜勤職員の様子を見てきます」

「ああ、そうね、それがいいわ」

山口には上井の言葉がから返事のように感じられた。山口は苛立ちのためドアを勢いよく開けた。その時、背後から上井の言葉が聞こえてきた。

「施設のイメージが問われないような答えを用意しなきゃ」

山口は廊下を歩きながら吐き出すように言った。「勝手に用意しとけ」

山口は二階に行くと藤田を最初に発見した夜勤職員を探した。早番の塚本から職員休憩室にいることを聞くと、一階にある職員の休憩室に向かった。休憩室に入ると夜勤職員を捜した。休憩室は幅広の長テーブルの列が二つ縦長に並んでいた。その職員は一番奥のテーブルに座っていた。隣には主任の佐藤が私服姿で座っていた。休憩室には二人以外誰もいなかった。佐藤は公休だったが職員から連絡を受け、施設に駆けつけたのである。

山口が近づき始めたとき、佐藤が山口に気がつくと、彼女は夜勤職員のそばから離れて山口に近づいた。佐藤は山口に夜勤者のメンタル面のケアは私に対応すると伝えた。山口は佐藤に礼を言うと、夜勤職員を見た。うつむいている顔は鉄仮面のような表情で、虚ろなまなざしで遠くを見つめていた。その姿を見た山口は思った。まるで抜け殻だ。無理もない、命を絶った藤田さんの姿を一番に発見したんだ。藤田さんはクローゼットの中にあるパイプに紐を巻き付けて首を吊ったらしいとのことだった。山口はその状態の藤田さんを見つけた夜勤職員の心境を考えると胸が張り裂ける思いだった。

山口は目を閉じて大きくため息をつく。休憩室を後にした。山口は休憩室のドアを閉めると思いを巡らせた。自殺の原因は何だ。俺にはまったく分からない。しかし、この施設で生活をしている以上、利用者の安全は絶対に確保しなければならない。それは自ら命を

絶とうとしても同様だ。その行為をやめさせなければならない。命を絶つ前に藤田さんの苦しみに気づき、その苦しみから解放させなければならない。なぜ俺を含め、利用者の一番そばにいる介護職員達は自殺するほど深く苦しみ悩んでいたことをキャッチできなかったんだ。そして藤田さんはその苦しみを介護職員に話すことができなかったのか。いや、そもそも自分の悩みや心配事を介護職員に話すことが藤田さんの選択肢の中にあったのであろうか。今の施設は業務優先の環境だ。そんな環境では利用者達が介護職員に悩みを打ち明けるほどの関係性の構築がなされているとは思えない。山口は歯を食いしばり、怒りが込み上がってきた。

「くそ！ 俺達はなぜ気づけなかったんだ！」山口は無性に何かを蹴り飛ばしたい衝動に駆られた。「情けない。何が新しい風を吹かせるだ。俺はここで何をしているんだ」俺がしていることは、結局、目先のことばかり考え無理をしない程度のその場しのぎじゃないのか。「単なる自己満足だ」山口は吐き出すように言った。

今の山口は藤田の自殺により自己否定感に陥り、考えることがすべてマイナス思考になっていた。山口は否定的思考のもと、再び考え込んだ。俺は日々の職務を本当に利用者目線での視点に立って遂行していたのだろうか。利用者が望むそれぞれの生活を可能な限り実現しようと力を尽くしていたのだろうか。もし全力で取り組んでいたら、このような悲しいことは起きなかったかもしれない。俺は利用者や職員にもっともらしいことを伝えてはいるが、それは単なる美辞麗句ではないのか。うわべだけの言葉を使い実は手を抜いて楽な道を選んでいただけじゃないのか。実際何も成し遂げていない。何が新しい風だ、堂々とそのセリフを言っていた自分が恥ずかしい。それに職員達は俺のことをどう思っているんだ。この施設に就任して間もない俺の人となりを知るよしもない。ただうるさい上司と思っているだけかも。しかし今の施設に新しい風は必要だ。ただそれを担うのが俺でいいのか……俺は一体どうすればいいんだ。山口は困惑の渦に飲み込まれ答えを見つけ出すことができなかった。

山口は足早に施設長室へ向かった。施設長室に入り、自分のデスクに着くと引き出しからスマートフォンを取り出した。山口はスマートフォンのラインを使って田村宛てにメッセージを打ち始めた。今日の夜いつもの居酒屋で話を聞いてもらいたい内容を送信した。山口は自分の悩みを田村に聞いてもらうことにしたのである。しばらくすると田村からの返信が届いた。山口は返信内容を目で追った。

『了解。では、いつもの時間で』

山口がいつもの居酒屋に着いたのは約束の時間より前だった。山口がボックス席で待っていると、田村が姿を現した。山口は立ち上がった。

「よお」田村が言った。

山口が田村に急な誘いに対して礼を言おうとしたとき、田村の後ろに女性がいることに気がついた。山口は女性の顔を見たとき驚きを隠せなかった。「あれ、高橋さん！」

田村と一緒に来た女性は、以前山口が勤務していた施設で看護部長をしていた高橋芳美だった。そして高橋も山口が辞める三か月前に退職していた。

「山口君、お久しぶり」高橋は親しみのある笑顔で言った。

田村と高橋は山口と向かい合わせに座ると、山口も続けて座った。

「元気そうね」高橋が言った。

「本当にお会いできて嬉しいです」山口は満面の笑みを高橋に見せた。高橋は山口にとって信頼でき、尊敬する人だった。山口は高橋を見て、前より少し太ったかなと思った。それ以外は以前の高橋と全く変わらない印象だった。高橋は小柄ではあるが、強風を真正面から受けてもよろけることがない、気の強い女性だった。そして今でも何事に対しても背を向けることはない気丈なオーラを醸し出していた。

「田村さんが会わせたいって言うからやって来たの。田村さんから聞いたわ。新しい職場を見つけたようね」

「はい」山口はうなずいた。「高橋さんはまだ勤めているんですか」確か高橋さんの歳は六十五を超えていたと思ったが。

高橋は笑みを見せながら言った。「山口君、まだはなしよ」

「あ、すみません」山口は苦笑をうかべながら言った。「それで、今も？」

「家の近くにある介護老人保健施設で働いているわ。ただ今はパートとしてね」

「でもな」田村が言った。「施設から応援の電話が入ればすぐに駆け付けているらしいぞ」

山口はくすっと笑った。「高橋さんらしい」

「家にいても暇だからね。ただ夜勤の応援は無理。気持ちはあっても、身体がね」

「そりゃそうでしょう」田村が言った。「もう年齢^{とし}を考えてくださいよ」

店のスタッフが注文を取りに近づいてきた。店員は田村と高橋におしぼりを渡すと伝票を持って注文を待った。田村は焼酎の梅割りのホットを頼み、高橋はレモンハイ、山口は中生を頼んだ。田村が続けざまに刺身と焼き鳥のそれぞれ盛り合わせを注文した。

高橋はおしぼりで手を拭きながら言った。「介護施設に就職したことを聞いて安心したわ。どこに就職したの」

「特養です。名前はすずらの里です」

「聞いたことがあるわ。場所はどこ」

山口が説明しているあいだ、高橋はうなずきながら聞いていた。

山口が話し終わると、高橋が言った。「あなたはこの業界で活躍すべき人よ。あなたの持てる力を十分に発揮できる場所」高橋は穏やかな口調で言った。

山口は言葉に詰まった。普段の自分だったらうなずいていただろうが、今の心境では素直にうなずくことができなかった。

「今日はな」田村が山口に言った。「お前が話したいと言っていたことを高橋さんにも聞いてもらおうと思って呼んだんだ」

そこに店のスタッフが飲み物を運んできた。

三人が乾杯をしたあと、田村が言った。「それで、話したいことってなんだ」

山口は中生のジョッキを見つめたあと、中生を一気に半分まで飲むと話し始めた。「管理職の役割を全うできるのか分からなくなりました」そう言うと再び中生をひと口飲んだ。

「何があった」田村が尋ねた。

山口は利用者が自殺したことで業務改善の自信に疑問を持ち始めていることを話した。

田村は山口の話を聞き終わると言った。「で、自分のやり方に疑問を持ったお前はもうどうしたいんだ。今の施設で介護長としての管理職を続けていきたいのか、どうなんだ」

「分かりません。自分がその器にふさわしいのか分からなくなりました」

「なんだよ山口」田村があきれた口調で言った。「それじゃあ先に進まないぞ」

その時、店のスタッフが刺身と焼き鳥の盛り合わせを運んできた。

「ほら山口、まずは食べろ」田村は焼き鳥に手を伸ばした。

山口は料理を見つめたまま言った。「今の自分じゃ介護現場を建て直すことができないんじゃないか、職員からは単に声を上げるだけのパフォーマンスをしているように思われるだけじゃないかって」

田村は焼き鳥を口に運ぶ手を止めた。「お前、かなり弱気だな」そう言うと焼き鳥を口にした。「なあ山口」田村は焼き鳥を食べながら言った。「お前は介護職をまとめていく立場だぞ。お前が求めている理想の介護を現場で実践できるように舵取りしなきゃならん。舵取りのお前が自信を失ってどうするんだ。現場職員、利用者はどうなる。へこたれるな」

山口は口をへの字にしながらゆっくりとうなずいた。

「山口君」山口と田村のやりとりを見続けていた高橋が言った。高橋の顔からは先ほど見せた笑みは消え真顔で山口を見つめていた。「あなたはやらなきゃいけないの」

田村は焼酎を飲みながら横目で高橋を見ながら思った。高橋さんは白黒はっきりさせる性格で言い方も歯に衣着せない人だ。今の山口には高橋さんのような竹を割ったような人に進むべき方向を指南してもらうのが一番だ。このあとは彼女にお任せしよう。

高橋は話を続けた。「あなたの話を聞いていて思ったことを単刀直入に言うわよ。あなたは単に自信がないだけ。きっとあなたのことから、新しい施設で気になることが色々目に付き、改善の声を挙げたんじゃないかしら、前の施設のようにね。でも上手くできるのか不安を感じている。前の施設では気心の知れた仲間がいて信頼できる関係性も構築できていた。でも今の施設ではあなたの人となりを知る職員が誰もいない。山口義雄という人と長く付き合った仲間もいない。で、今のあなたは孤立無援を感じている」

山口はうつむき小さくため息をつくと言った。「ええ、まあ」そう言ったあと、山口は口に出すことはせず心の中で言った。いつも身近でサポートしてくれた高橋さんもいない。

「山口君」高橋が言った。「でもそれって世間じゃよくある話じゃないかしら。あなたと同じような境遇の人は大勢いると思うわ。それを皆乗り越えているのよ」

山口はうつむいたままでなにも言い返せなかった。

高橋はうつむいた山口をしばらく見つめたあとに言った。「負けてしまいそうね。今のあなたの思考は負の感情が優先している。不安や動揺が人の心を支配しているときって、なにを考えたって上手く解決できない。そして今のあなたは自分が抱えている様々な課題に加え、施設で起きた自殺も全部一つの器に入れて一度に考えようとしてない、違う？」高橋は首を横に振った。「だから考えがまとまらず、不安の思考が常に頭の中で渦巻いている。足元がおぼつかない状態になり、まとまるものもまとまらない」そう言うと、高橋は体を前のめりにして言った。「それじゃ負けるわよ」

「今回の自殺だって」山口が力なく言った。「自分が気づくことができなかったことに責任を感じます。気づくことができなかった自分は――」

「もう、なに言ってるの」高橋が強い口調で遮った。「あなたに気づくことができたの。じゃあ聞くけど、あなたは人の心の中を読み取ることができるの？ かっこつけないで」

「別にかっこつけているわけじゃなく自分は――」

「やめて！」高橋が遮った。彼女は山口を射るような視線で言葉を続けた。「私から見れば

あなたは過剰な自己否定、いや、逃げていることを正当化するために自分を責めているだけ。いいこと、あなたが今やらなければいけないことは、今起きている事を冷静に見つめ、やるべき行動はなにか、それだけを考えなさい。なにをすべきか、自分取る行動が正しいか正しくないかは結果が示してくれる。さあ、焦点を当てる先を悩んでいる自分の内面から利用者、職員に向けなさい」

田村は背もたれに寄り掛かり腕を組みながら高橋を見つめた。口元に自然と笑みを浮かばせながら思った。相変わらず直球だな。でも、その高橋さんの裏表のない言動が皆から信頼される理由ってことだ。地位や利害関係に左右されない性格、きっと今の職場でも皆に安心感を与えていることだろう。今日、高橋さんと呼んで正解だったな。

「厳しいことを言うけど」高橋が話を続けた。「あなたは今回の自殺を理由にして現実から逃げようとしているんじゃない。あなたの負の一面がこれを機に助長して、本来のあなたらしさが消されている。あの頃のあなた、何事もやり遂げようとする強い意志をもった山口義雄がね。今のあなたは防波堤に守られた小波しか立たない港の海で泳いでいるだけ。そして小波程度の問題だけに向き合っているにすぎないわ。外洋に出て大波に立ち向かう勇気がない。それが今のあなた」

山口は否定することができなかった。

「勘違いしないでね」高橋が言った。「別に私はあなたを責めているわけじゃないのよ。私はあなたに以前のように活躍してもらいたいだけ。率先して進んで行くあなたに戻ってちょうだい。今のあなたは一歩進んでも気持ちが二歩下がっている。それじゃゴールに到達することはできない。それはあなたも承知のはず。だって自分から二歩さがっているんだもの。だから前に出した一歩は、あなたが言うパフォーマンスになる。でしょ」

山口は目を閉じてため息をついた。そのとおりだ。山口は思った。俺は今の施設ではただ言葉を発しているだけだ。高橋さんが言うように一歩しか進んでいない。それに今の俺は次の一歩を上手く踏み出す自信がない。

「あなたは何をすべきか分かっている」高橋が言った。「でももう一人の弱気なあなたがそれを邪魔している。そうでしょ。ねえ、ニッパチ闘争って知ってる」

「えっ、ニッパチ闘争、いえ知りません」

「そうよね。それは私達看護師がまだ看護婦と呼ばれていた昭和の頃、確か一九六八年頃に起きたものなの。その頃の看護婦の労働待遇は酷いものだったわ。今の介護職以上にね。一ヶ月二十回の夜勤をしたり、一日十三時間労働は当たり前。身体が悲鳴をあげて

も、しっかり休むことができない環境だった。質の向上を考える余裕なんてない。オーバーワークにより心身共に疲れきった看護婦達は毎日、ただ医療事故がおきませんようにと祈りながら仕事をしていたのよ。結果健康を害する看護婦が増え、中には流産した人もいたのよ。どう、想像できる」高橋はレモンハイのグラスを持ち上げて一口飲んだ後に話を続けた。「そして看護婦達は劣悪な環境に限界を感じ、ついに環境改善の行動を起こしたの。なにをしたと思う」

山口は想像できなかった。「いや分りません」

「ストライキやデモ行進をしたのよ。この運動は新潟県の県立病院の看護婦達から始まり、あっという間に全国に広がっていったの。そして国を動かしたわ。ねえ想像できる、病院で看護婦達がストライキやデモを起こすのよ。今の時代では考えもつかないかもね」高橋はそう言うと、レモンハイを飲んだ。「その頃の日本は学生運動が盛んでストライキやデモ行進が日常茶飯事におこなわれていた時代だった。だからこそ当時の看護婦達はその手段を今より抵抗なく実践できたのかもしれない」

「学生運動」山口がつぶやいた。

高橋は山口が物思いにふけるような様子を見つめていた。

しばらくすると山口は小久保から聞いたスローガンの一部を静かにゆっくりと言いだめた。「力尽くさずして挫けることを拒否する」

高橋は山口の言葉を聞くと目を見開きながら言った。「まあ！ 勇ましい言葉じゃない。その言葉、自分で考えたの」

「いえ、入所者の方から聞いたスローガンの一部です。その方は東大の安田講堂で学生運動に参加していたようです」

高橋の口元に笑みが浮かんだ。「安田講堂……東大で闘った方が入所しているの」

山口がうなずいた。

高橋はしばらく山口を見つめたあとに言った。「そしてその方が介護職を取りまとめるあなたにそのスローガンを伝えた」

山口は再びうなずいた。

「山口君」高橋が笑みを崩さずに言った。「安田講堂で闘った入所者がなぜあなたにスローガンを伝えたのかしら」

山口は答えが見つからず、首をゆっくりと振った。

「多分だけど」高橋が言った。「あなたに^{なすき}襷を渡したのよ」

「^{たすき}褌を？」

「さあ山口君、気持ちを一度リセットして一つひとつ整理しながら考えなさい。そして目の前に見える個々の課題ばかりに注目してしまい、本来手をつけなければならない本質を見過ごさないようにしなさい」

「本質……ですか」

高橋がうなずいた。「木を見て森を見ず。あなたは小さいことに目を捕らわれすぎているのかもね。確かに目の前にある様々な課題を解決することは大事よ。でも時にはもっと大きな視野で現状の様々な課題の根幹を見据えて考察することが求められるわ」

「大きな視野……課題の根幹……」

「人は環境によって変化するものよ。じゃあ例えば認知症の方が見せる周辺症状の対応で考えてみて。その場の言動だけに対応した介護では問題解決にはなっていないわよね。あなた達介護福祉士はしっかり深掘りするでしょ」

「ええ、その言動に至った原因を探ります」そう言うと山口は高橋を見つめた。

高橋は山口の思っていることが分るかのようにつくつくとうなずいた。

山口は目を細めながら言った。「まさか……国に訴えろと」

高橋は視線を上に向けた。「力尽くさずして挫けることを拒否する」高橋は噛みしめるように言った。「うん、その言葉とても気に入ったわ。ねえ山口君」そう言うと、高橋は山口を見た。「利用者は施設の環境次第で満足度の度合いは変化する。これは介護の現場職員にだって同じ事が言えるはず。施設で見えてきた様々な課題、その悪影響が及ぼす利用者への環境。課題の根幹には国の姿勢が見える気がするわ。さあ、変化を起こすのは誰かしら。あなたよ。あなたは今までに風を起こした人、そしてこれからも」高橋はレモンハイを飲んだ。「ニッパチ闘争に参加した看護婦、安田講堂の学生達、皆が相当の勇気、覚悟をもっていたはず。あなたならその気概、分るわよね」

山口は困惑の表情を浮かべた。「私にデモ行進のような大きなことはできませんよ」

「デモ行進をしろとは言っていないわ。自分達の要求を示すために今できることは何かを考えなさい。人々が関心を引く行動をね。大衆をいかに巻き込むかを考えたとき、今の自分にできる最良の方法は何か」

「今できること」山口は思い浮かばず高橋に尋ねた。「いったい何でしょう」

「知らないわよ」高橋は即答した。「当たり前でしょ、私はあなたの職場に立っていないのよ。あなたの職場でしょ、あなたが職場というフィールドに立ち、感じ取りなさい。感じ

たことを信じれば、なにをすべきかが見えてくるわ」

「感じ取る……」

高橋はうなずいた。「その時期を逃さないでね。それは突然やってくる時もある。自分の直感を信じなさい。あなたならできるわ」

山口は苦笑い浮かべた。「私のことを過剰評価してますよ。私はまだまだ人間です」

「あら、そうかしら。あなたと一緒に働いていた頃のあなたを思い出すわ。介護職の責任者として施設の改善を声に出し、新しい風を起こしていたわ、先頭に立ってね」

「いやいや、運が良かったんですよ。私の周りにいた職員のモチベーションが高かったお陰です。それに高橋さんもいてくれた」

高橋はしばらく山口を見つめたあと穏やかな口調で論ずるように言い始めた。「それはね、あなたの人となり皆を惹きつけたのよ。豊富な知識を持ち、優れた技術を修得したからといって、周りの人がその人についていくかは分からない。その人について行こうと感じさせるのは、豊かな人間性、相手を思いやる心を持っているかどうか。そう、あなたのようにね」高橋は穏やかに笑みを浮かべた。

山口は高橋の笑みを見て息を呑んだ。高橋の笑みを見た瞬間、以前高橋と共に働いていた時の高橋が見せた笑みが脳裏に浮かんだ。それは山口が業務改善のための提案を高橋に伝えたと大抵の場合、笑顔を浮かべ「いいわよ、やってみて」の言葉が返ってきた。

あの頃の笑顔だ。山口は思った。自信を持つことができたあの笑顔だ。そうだ、自分を信頼してくれた人が目の前にいる。今でこそ共に働いてはいないが、今まで自分を信じて委ねてくれた人に、今の自分を見て失望させることはできない。

高橋は山口がじっと自分を見つめ続けているのに気がついた。「なに？ どうしたの」

山口はゆっくりと口を開いた。「やりましょう、あの頃のように」

高橋は山口の表情に揺るぎない意気込みを感じ取った。「あなたには沈んだ顔より挑戦を決意した覚悟ある顔が似合っているわ。さあ、風に向かって立ちなさい。その行動こそが皆があなたに興味をもち、やがて興味が期待になってついにはあなたと共に歩み始めるわ」

二人の会話を黙って聞いていた田村の顔に笑みがこぼれた。田村は高橋を見つめながら思った。自信を失いかけ、思いわずらっている山口の心情を高橋さんが見事に打ち消し、彼が乗るべき軌道に導いた。さすがだ。

高橋が自分を見つめる田村に気がついた。「なに？」

「いえ、別に」そう言うと、山口に顔を向けた。「さあ、方向が定まったな。おい山口、デモ行進もおもしろそうじゃないか」

「確かに。できるものならやってみたいです。でも私には無理ですよ」山口が即答した。
「まあな。まあ、いずれしてもだ、お前は声を大にして呼びかける使命を担う立場にいるんだ。施設の中で声を出しても外へは響かない。仮にデモ行進のようなことを起こせばマスコミが食いつき、世間に広がっていくだろう。上手くすればマスコミが大衆に興味を惹くような報道をしてくれるかもしれん」田村はたばこを取り出すと火をつけると煙を吐き出した。「いかにして声を出すか、だな」

山口はうなずいた。

田村はテーブルにあるコールボタンに手を伸ばした。「そして今の俺は皮ニンニクが食べたいからこのボタンを押して自分の要求を声に出す」

高橋は田村を見てクスッと笑ったあと、山口に顔を向けるとゆっくりと言った。「その時期を逃さないでね」穏やかに重みのある口調だった。

「おい山口」田村が言った。「俺の好きなブルース・リーも言っていた。考えるな！ 感じる！ と」焼酎を一口飲んだ。「山口、今こそ介護福祉士のプライドを見せる時だ。介護のプロとしての気迫を見せてみろ。プライドを持ち、堂々と自分たちの存在価値を認めさせてみろ」

「こうしている間にも」高橋が言った。「利用者の辛さや寂しさが広がっているかもしれないわ。さあ腰をあげて五感を使い感じ取る心構えを持ちなさい。新たな物事が生じた時に動じることなく自分は何をすべきかしっかり判断できるようにね。そしてその時の直感を疑わず信じなさい」そう言うと、高橋は山口の自分をじっと見据える表情を見て安堵した。「伝わったようね」

その時、店のスタッフが注文を聞きに来た。

田村は皮ニンニクを注文すると、山口に言った。「おい、中生がないぞ。まだ飲むだろ」
山口はゆっくりうなずくと言った。「ええ、これからが本番です」

三人は居酒屋を出ると、田村と高橋は山口と別れ駅に向かって歩いていた。

高橋が田村に言った。「これでお役御免ね」

田村は言葉の代わりに高橋に笑みを見せた。

「今日私を呼んだのは彼のお尻を叩くためだった。でしょ？」

田村は高橋を見つめたあとに言った。「今日は美味しいお酒が飲めました」田村は頭を下げた。